

アフリカの国で

この夏初めて、西アフリカのカメルーンを訪ねる機会に恵まれた。数年前までその国について殆ど知識の無い私であったが、思いがけず家族がボランティアとしてそこで働くことになった関係で、急にその国名が身近なものとなり、今回の訪問ということになったのである。

僅か十日足らずの滞在で、しかも家族に久々に逢う

梶田 正子



ことが目的であったから、様々な見聞ができたわけではないが、それでも初めて訪れた国の様子は印象深いものがあつた。

歩く姿

まず目についたのは、道を歩く人たちの姿であつた。私が首都ヤウンデに近い飛行場に到着したのがか

なり夜の遅い時間なのに、そこから滞在地のバルマヨという町まで車で約一時間走る間にも、街灯も何も無い真暗な道路を歩いている人たちが、何人もヘッドライトに照らされては消えていった。朝も早くからである。足どりは、せかせかと早くはないがのんびりとゆっくりでもなく、だが誰もがしつかりと身体を前に運んでいるといった様子に見えた。そして時に知り合いに会おうと、そこで立ち止まってしばらく互いに談笑し、再び歩き出すのである。言葉がわからないので何を話しているのかは不明であるが、出会っては話し、出会っては話して、見てる私の方が、あれでは予定通りに目的地に着かないのではとか、あんなに誰とでもしゃべることがあるのだろうかなどと、余計な心配をしてしまうほどでもある。

歩くことも出会った人と話をすることも極く普通のことなのに、私が普段経験している都会の生活の中の「歩き」とはどこか違う「存在感」みたいなものが感じられる「歩き」である。どうしてこんなに印象的な

のだろうかと考えた。

国内に産業らしいものは何もなく、資源も乏しく、カメルーンは非常に貧しい国である。他の途上国にもありがちな傾向で、役人などの一部の人達は非常に贅沢な生活をしているようであるが、多くの人々は水道も電気もない家に生活している。道路はあるが公共の交通機関は整備されていないので、現金収入の無い人々はギユウギユウ詰めの乗合タクシーを利用することもできず、移動の手段は基本的に自分の足で歩くことである。医者診察を受けるために、数日歩いて病院のある町に行くという話も聞いた。町に行くのも誰かを訪ねるのも、歩かなければ実現しない状況の下で、「歩くこと」は彼らが生きて生活していることそのものなのだろう。人と出会い、直接言葉を交わして情報を交換し合うことは、人間としての社会生活の中心なのであろう。

一方、物があふれ科学技術が発展した私の今の生活の中で、人間として生きている基本はどこに見ること

ができるだろうか。食べることも寝ることも隅の方に押しやられ、間接的部分的なコミュニケーションで間に合っているかのように錯覚している私たちは、何のためにそのような生活をしているのだろうか。カメラーンという国で強い印象を受けた歩く姿に見られる力強い存在感は、私があわただしい生活の中で見失いかけてきた人間としての基本的な部分を率直に表現していると言えるのかもしれない。

子どもたち

私が訪ねたのが、九月の進級、新学期を前にした夏休みの時期であったから、子どもたちの遊んでいる姿がたくさん見られるであろうと楽しみにしていた。ところが意外にも、子どもたちの遊び戯れる様子はほとんど見ることができなかった。僅かに、小学校高学年から中学生ぐらいの男の子どもたちが、学校の校庭でサッカーに興じていたが、それ以外にまず目付いたのは、じっとしている子どもの姿である。仕事が無い

ために一日中家の前に腰かけているおとなたちは少ないのであるが、小学生ぐらいまでの子どもも、その傍で何するでもなく立っている光景がそこに見られる。日本で、多くの子どもたちが自分から何かを見つけて遊びを進めて行く姿を見慣れているせい、動きのない子どもたちの様子は何か不思議な感じがして、彼らの興味はどこにあるのだろうかと思った。だが、もう少し気をつけて見ると、頭に鉢をのせて水を汲みに行く女の子や、果実や薪をやはり頭上にかけて運んでいる子どもたちがいることに気づいた。夏休みだから、子どもがたくさん遊んでいるだろうと考えた私の認識が、あまりにも単純でこの国の状況とはかけ離れたものであったようである。多分ここで子どもたちは、おとなの生活の一部分であり小さな労働力なのだろう。

ある日、付近を少し歩いてみようと思ふと、小学校低学年ぐらいの数人の女の子がいた。私と私の家族が笑顔を向けると、彼女たちもニコリしてついて来た。この国の子どもたちは丸い顔にパッチリとし



▲村の家の庭先 多くの家はこのような泥の壁で、写真のようにところどころ壁が落ちている。窓はあるがガラスは入っていない

た大きな目で、とてもかわいい。歩きながら子どもたちは片言の英語で話しかけてきて、我々が履いているくたびれたサンダルをしきりにほめた。チョコレートが好きだとかビスケットが好きだと言った子どももいた。少し歩いて再び宿舎の前に戻って来た時、一人の子どもが私の履いているそのサンダルが欲しいと言いつ出し、他の子どもたちも口々に、それがだめなら違うものでもよい、といった意味のことを言い始めたので、我々は「それはできない」とはっきり断わった。一瞬にしてあんなに愛らしくかわいかった彼女たちの笑顔が消えて、目が厳しいものとなり、何やらヒソヒソと話したかと思うとスーッと我々から離れて行ったのである。子どもたちをととても遠く感じてさみしかった。

帰国からしばらくたった今なお、彼女たちの一瞬の表情の変化が、私には忘れられないものである。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)